Title:133-154千々岩6.ec8 Page:133 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:22

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

研究ノート

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

~千々岩助太郎のNHK解説から~

千々岩 力

はじめに

蘭嶼は日本植民地時代は紅頭嶼と呼ばれ、タオTAO族(旧名ヤミYAMI族)が住む、台湾南東部の離れ小島である。タオとは、アイヌと同じく人=人間との意味であり、他の台湾タイヤル族、セダッカ族、ツオウ族も、同意義である。ヤミとの命名は鳥居龍蔵である。以下、主としてヤミ族と、便宜上呼ばせていただく。

なお、台湾原住民族は現在約40万人で、14民族が台湾に住んでいる。本稿は、私の父である千々岩助太郎(以下、SKと略)が、"紅頭嶼"と題して、1940(昭和15)年8月22日に台北放送局JFAKより放送した、JFAK作成による活版刷り放送記録原文を再録し、私の2007年3月の訪問調査と先達の関連する記録の一部を[補注]として付すものである。当時から約70年も経て蘭嶼の調査研究が多角的に進展した現在では、一般向け解説でもあり内容的価値に見るべきものは少ないといえるが、近代化のなかで徐々に失われていく"当時の状況"を記録しておく点に若干の意義を求めたい。

なお、私の専門外の本稿をこの紀要に載せていただく本音はという と、間近となった本学退職後は、文化人類学を学び直して台湾研究に余 生の遊びを見つけたい、とその第一歩にしたいと思うからである。素人 ゆえの初歩的誤りと稚拙な〔補注〕については、ご叱声とご寛容を心か Title:133-154千々岩6.ec8 Page:134 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:22

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

ら乞う次第である。

(SKは1897年生1991年没、建築史専攻工学博士・学位論文「台湾高砂族住家の研究」。台湾山岳会常務理事も勤め、3000m以上の山が200座近くある高峻な山中のいわゆる蕃界をくまなく歩き調査した)

以下、『~』内が、放送原文である。

[紅頭嶼]

----昭和15年 8 月22日JFAKより放送---

紅頭嶼の位置

『天気の好い日に台東の海岸に立ちますと、東の方と南の方とに二つの島が見えます。東の方に見える島が火焼島でありまして、南の方に遙かに遠く見える島が、只今お話いたします紅頭嶼であります。即ち紅頭嶼は台東の東南90キロ、本島の南端鶖鑾鼻の東北40海里の位置にありまして、南はバシー海峡を距てて米領フイリッピン群島の北端バタン列島に対峙しています。』

〔補注〕

- ・火焼島の現在名は緑島、最近まで政治犯の刑務所が置かれ、前総統の 陳水扁氏も入っていたことがある。
- ・紅頭嶼はフイリッピン群島の北端バタン諸島の北端ヤミ島から74キロ。西欧の航海者間には17世紀より知られている。
- ・島の最高地点は紅頭山552m。
- ・発祥の口碑に、他の各族が台湾本島をその発祥地とするのと異なり、 太古南の諸島から移住と語られている。移住当時は、本島東部のアミ 族パイワン族との多少の交渉があったらしいが、近代はその交渉は全 く絶たれ名実ともに隔離された島嶼となっていた。

未だに文化人類学、建築学その他の原資料が現存かつ生活手段として

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:135 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:29

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

使用中である

・蘭嶼の住民・人口分布 1940年当時は以下に示す1700人余のヤミ族の他は、数名の警察官吏と その家族のみだった。

1939年12月末現在			2006年?月(蘭嶼郷戸政事務所)				
				平地原住民		山地原住民	
蕃社	戸数	人口	村里	戸数	人口	戸数	人口
イマウルツル社	32	165	紅頭村	7	28	255	828
イラタイ社	79	365					
イワタス社	10	31	+4.14.400	9	24	197	706
ヤユー社	79	369	椰油村				
イララライ社	74	330	朗島村	1	9	199	727
イラヌミルク社	59	268	古法县	7	33	297	1090
イワギヌ社	61	249	東清村				
計	400	1777	計	24	94	948	3351

表中、平地原住民と山地原住民の区分けがあるが、山地原住民がタオ族を示す。しかしタオ族は海岸に面する平地に元々から住み、山地原住民ではない。

なお、日本からの返還直後である「1946年5月、自治制が離島のこの 島にも施行され」、「各社は新しい紅頭、東清、漁人、朗党の4村に編成 された」(国分直一『東シナ海の道』所収"近年における蘭嶼(紅頭嶼) ヤミ族の変容"参照)が、現在は表中の4村となり、旧来の各社は再編 されている。 Title:133-154千々岩6.ec8 Page:136 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:29

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

交 通

『現在この島に渡航します船便は毎月4日と19日との2回台東から火焼島方面の定期船がありますが、僅か90トン余りの頗るあやしげな船であります上に台東も、火焼島も、紅頭嶼も、何れも港も桟橋も無いために、天候の都合では幾日も出帆が延期されて、この位あてにならない定期船はありません。台東から火焼島まで3時間、火焼島から紅頭嶼まで7時間、合計10時間の航海でありますが、荷役および日の出日の入りの関係で往復とも火焼島に数時間乃至10数時間停船しますので、船に自信の無い人にはこの航海は全くの難物であります。』

〔補注〕

・定期船はいわゆる発動機船、夏期は颱風、冬期は季節風の影響で欠航 が多く数十日間の交通途絶も珍しくなかった。現在は、船便の他小型 機が飛び所要時間約20分である。

地 形

『紅頭嶼の面積は約48km』、周囲は約36km ありますが、海抜548mの紅頭山を始め山岳地帯が多く、海岸に沿うて僅かに平坦地域は緩傾斜地がありましてその部分に蕃社が点在しています。』

〔補注〕

・蕃社;住家の一塊、部落。昔は蕃人と差別的に呼んだが、大正12年、 昭和天皇の皇太子時代に行啓があり、皇太子の示唆もあって昭和10年 頃から高砂族と呼びはじめた。

気 象

『気温は年中高いのでありますが、冬季には稀に摂氏14.5度まで低下することもあるそうです。真夏でも常に風があって、日光の強烈な割に暑さはさほど感じません。しかし雨量が多くて、殊に温度が高くて何時

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:137 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:29

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

もじめじめしているのには閉口でありまして、写真機やフイルムの保存には相当の注意が肝要であります。又年々11月から翌年3月頃までは雨期で季節風も強く、夏の間はしばしば颱風の襲来や余波を受けることが多いので、渡航するには4月か5月頃が最上であります。』

〔補注〕

・07年3月27日、台東市は観測史上第1位の37.4℃、新聞は焚風!と報じたが蘭嶼もまさに熱風そのものであった。

紅頭嶼の特異性

『以上のごとく紅頭嶼は交通不便な、且つ気候の悪い小島に過ぎないのでありますが、この小さな島が土俗、民俗学方面にも又自然科学の方面にも実に驚くべき特異性を有していまして、本邦学術界の一焦点となっているのであります。先ず生物学において生物分布上の一区画をなしているワーレス線の北端が台湾本島と紅頭嶼及び火焼島の中間を通っています。従って台湾本島は生物分布上から見ればその区系は支那に見るべきものでありますが、紅頭嶼はフイリッピン区系に入るのであります。また言葉などもフイリッピン群島の一部であるバタン語の方言であると言われています。実際またこの島に住んでいるヤミ族を見ましてもその容貌といい又温順な性格といい、所謂蕃人というよりも土人といった方が遙かに適当の様に思われます。即ち日本の領土で然も台湾の一部でありながら、この小さな島のみは学術的にはフイリッピン系に属するということに大きな興味があり又珍重がられる所以であります。

私は昭和12年4月と本年6月と2回この島に参りまして、約40日間滞在して建築学上より住家の研究調査をしたのでありますが、滞在中に見たり聞いたりしたいろいろの風習についてお話致しましょう。

[補注]

・蕃人、土人など原文のママにするが、SK自身は天性的な差別意志皆無

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:138 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

の人間である。

ヤミ族と社会制度

『紅頭嶼に常住する人間は数名の内地人警察当局及びその家族の外は全部ヤミ族という高砂族即ち蕃人であります。人口は本年6月現在で1768名で年々多少ずつ増加しています。七つの蕃社に分かれていますが本島における他の種族の如く、頭目制度等はなく全く平等の生活をしております。蓋し衣食住に困難せず貧富の差が少ない為でありましょう。尤も現在では官に於て統治の関係上官選の頭目が設けられていますが、他の種族の如く勢力も統御力も持ちません。』

〔補注〕

- ・日本統治の関係上官選の頭目を置いたがすぐやめて村長という名称に変更し、支配権限など無かった。頭目制がなく全く平等という点では、他の原住民族と比較して建築上の特色はないことになる。頭目は前面に配下が集まる小広場を持つなど大きく立派な住家にいる。なお、鹿児島県屋久島の昭和15年頃の聞き取りに、「島であるがゆえに特別に権力を持つ者を作らないようにし、平等配分と共助の制度が整い、その生活を守ってきた生き方…」(宮本常一「民俗学の旅」110頁、講談社)がある。
- ・頭目は一般には、社=部落の統治者で外交の代表、内治、司祭等をする者である。パイワン族の場合、特権として、土地領有権、蕃租農租 徴収権を持っていた。世襲頭目、推挙頭目との分類、成層社会として 貴族たる頭目階層と平民階層にも分類できる。
- ・タイヤル族、ブヌン族らと違い、出草(首狩り)の風習も勿論ヤミ族 には無かった。

ヤミ族創生神話

『ヤミ族の創生神話は蕃社によってまちまちでありますが、イモウル

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:139 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

ツル社で言い伝えられているものを一例として申し上げます。

即ち神様が大森山に降りてきてそこの石に触れたら男子が生まれた、 又傍らの竹に触れたらやはり男の子が生まれた。この二人の男子を残し て神は昇天されたが、残された二人は各々自分のヒカガミを摩擦してい たら右のヒカガミから男子、左のヒカガミから女子が生まれて此処に三 組(ママ)の男女ができた。初めは石から生まれたもの同士及び竹から 生まれたもの同士が夫婦になったところ、生まれた子供は何れも盲目で あった。そこで落胆の余りお互いに相談の上両方の女を交換して夫婦に したところ始めて完全な子供が生まれたということでありまして、この 伝説は今なおお祭りの時などにも唄い、なお現在においても親族同士の 結婚は絶対にやらないそうであります。

勿論この創生神話は伝説でありましてこの種族が紅頭嶼に発祥したものとは考えられませんし、体質、人類学上より見れば広義の馬来系であるということに学者の意見は一致しています。又言語から推しても或いは又現在ヤミ族の内にも南から来たと言っている者もあります位で、これらの事実から考察して或る時代にこの方面より移転してきたのであろうと想像されます。』

〔補注〕

・さきにふれたが、台湾原住民族はそれぞれが口碑をもち創生神話が伝 えられている。

暦

『ヤミ族の暦は総て陰暦で月が標準になっています。1年を13ヶ月に分けていて、その月に依って年中行事が定まっています。例えば2月をカポアンといって飛魚を取り始める月、7月をビヌスノマタウといって魚取りは一切止めて家の改築や船の建造をする月、12月をカピトアンといって神様を祭り又粟蒔きをする月というように、その月の行事がそのまま月の名称になっているのは面白いことであります。』

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:140 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

〔補注〕

- ・「カポアン=2月」飛魚を取り始める月、「ビヌスノマタウ=7月」魚 取りを一切止める月」この2月と7月は陽暦に当てはめての月名であ る
- ・1月=カオワン、2月=カッシャマン、3月=カポアン、4月=ピヨコカオル、5月=パパタオ小さい船で飛び魚を取りにいく意味、6月=ピラピラ網で魚取る、7月=ビヌスノマタウ、8月=ピヤムアン、9月=ポアハウ、10月=ゲタナタナ、11月=アルマヌ、12月=カヌマン、13月=カピトアン
- ・カレンダーも入手したが陽暦に慣れている私には実感できなかった。

日常生活

『またヤミ族には勿論時計と言うものはありませんが、夜が明けると共に起き出て朝食をすまして仕事にかかり、午後三時頃中食をします。中食後はあまり仕事をせずぶらぶらしているようでありますが、日が没する頃に夕食をすまして間もなく寝るのが一日の行事であります。 仕事というのは漁撈と農作が主なものでありますが、男子の仕事と女子の仕事がはっきりと分かれているのも面白い習慣であります。即ち漁撈は男子の仕事で女子は一切関与しません。また農作は女子のみの仕事であります。漁撈も1年の内5カ月位でありますので、漁撈に行かない間に男子は家の改築や船の建造、或いは田畑の開墾や薪取りなどをやっています。』

〔補注〕

・台湾本島ではアミ族を除きいわゆる高地民族であるが、そこでは一般 に男子は狩猟、女子は農作と家事に従事している。

漁 撈

『本島に住む多種族の蕃人が山に行って狩猟することを何よりも好み、

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:141 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

鉄砲を命よりも大切にしていた様に、ヤミ族の男子は海に出て魚を獲ることを最も好みます。好むというよりも寧ろ彼らの本業であります。 従って船を大切にすることは想像以上であります。いろいろなお祭りのなかで船を造った時の祭が最大のもので、その次が家を造った時の祭であります。漁撈に出かけるのも一定の期間のみで、始める時も又終わる時もお祭をしていますのを見ましても、いかに彼らが漁撈を重んじ又信仰的に見ているかが判ります。満潮の時になると5、6歳の男子は板片一枚を持って海岸に出て波乗りをして遊んでいます。全く彼らは小さい時からこうして海の子として育てられています。』

〔補注〕

- ・本来的漁業は、主として飛魚(アリバンバン)である。獲り方は現在 も、松明漁と呼ぶ夜間に松明を燃やしその火を目掛けて飛んで来る飛 魚をタモで受けて獲るもので、大型のシイラも混じる。従前は主とし て6人乗り8人乗りなどの手漕ぎ船だったが近年は人手不足で小さい 船が主流になった由。船には女は乗せない、魚がいなくなる、女は死 ぬとの理由である。獲った魚は専ら自家用で各自の家の軒先に背開き にして、蠅が真っ黒にたかったまま干されていた。わたしは蘭嶼では 新鮮な魚を口にできると思い込んでいたが皆無だった。この漁業関係 にも旧来からの儀礼や禁忌があり、例えば性別により食べてはならな い、男だけが食べる魚も区分けされている。
- ・近年漁獲量が減った一因として、中国漁船団の横行を挙げていた。

チヌルクラン

『彼らの船は10人乗りの大きなものから1人乗りの小さなものまで数種ありますが、10人乗りなどはチヌルクランといって、共有物で1番社に数隻しかありません。文化の低い原始生活をしている彼らでありながら、この船の構造のみは実に進歩していまして、獨木船ではありません。堅固な龍骨を以て骨組を構成した後数枚の側板をこれに固定し、さらに

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:142 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

外部には彫刻を施し紅と白と黒の三色を以て見事に色彩したものであります。』

〔補注〕

- ・私は今回イマウルツルに泊まったが、隣の浜であるイラタイに10人乗りのチヌルクランが1隻あった。全島を一周したが大型はその1隻のみであった。もっとも、台湾まで漕いでいくとの言わばイベントのために超大型の確か14人乗り(漕ぎ手14名)が1隻出来上がっていたが屋根下に突っ込んである様子で、伝統に反する規格外の大型船は祟りがあるとされ、古老の任務である進水式の仕切り手になる者がいない、とのことである。
- ・材料用の樹木には若木の時から所有者の名前が付けてある。
- ・船の分類

Tinurukuran; 10人、8人、6人乗り

Pinononogan; 4 人乗り Pikabagan; 2 人乗り Pikatagian; 3 人乗り

(シマガン氏は1人乗りをプカタニヤン、といった)

・船の装飾

色彩紋様とも驚くほど綺麗の一語に尽きるが、紋様は民族の伝統を踏まえた一定の統一性をもった絶対的な意味があり稚拙なものではない。

• 船艙

日常的に使用される船は砂利の多い砂浜に並べられていて、これで海にでるのかと訝るほど一見ちゃちに見える。しかし各所有者の家には船艙が有り、船の大きさに準じて地盤を長方形に掘り下げて、入り口は海に面し、内部に石を積んで壁を作り、屋根は丸太か丸竹を交叉してこれに棟木を架し、茅葺きである。

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:143 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

服装

『男女とも4、5歳までは真裸でありますがそれ以上になりますと、男子は幅12センチ位の丈夫な褌をしめ女子は短い腰巻を用いますが、14、5歳までは男女とも上衣は持ちません。14、5歳になりますと漸く短いチョッキのような上衣を持っていますがこれも普通はあまり着ていません。女はアユブといって胸あてのみをしています。男女とも跣足で、髪は男子は子供から年寄りに至るまで奇妙なオカッパで大きくなると無造作に束ねて大きな櫛をさしていますが、古来の風習にしたがえば二通りか三通り位の結び方があるようです。

旅行する時や仕事にでる時はヤシの皮や藤の心やツルアダンなどで作った上衣や帽子を用い、又旅行用として鎗を持ち脇刀をさげて行くこともありますが、護身用というよりも悪魔除の物であります。装身具としては男女とも14、5歳から、ふうせんかつらの黒い実と白いボタンとで拵えた首飾や腕輪を用いていますが、お祭の時などは家に代々伝わっている瑪瑤やトンボ玉をつないだ相当立派なものを用い、銀兜なども又お祭用であります。』

〔補注〕

・他の部落、集落に出かける際は兜と胴巻きを着用し槍と刀を持って正装する。本来は悪魔除であったが、今では偉く見え金持のようにも見えるためという。なお、下半身は褌のみである。

食

『ヤミ族の常食はさつま芋でありますが、副食物としては干魚が主でその他タニシ、カワニナ、水芋の茎などや、季節によってはばんりゅうがん、おおばあかてつの実、パンの実、りんとうの実などを食べています。豚や山羊或いは鶏なども飼育していますがこれらは数が少なく非常に貴重なもので普通には食べません。例えばこの豚は今度子供が嫁を貰った時御馳走するもの、この山羊は今度家を改築する時の御祝にする

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:144 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

もの、この鶏は今度子供が生まれた時に母親の栄養にするものという具合に大切に養っています。またヤミ族は酒や煙草の味をあまり知りません。これは本島各地の蕃人が老幼男女を問わず愛好するのとは全く相反したことであります。ヤミ達は煙草と同じものだといってビンローの実をかんでいます。』

〔補注〕

- ・シマガン氏談、水芋が獲れなくなって生活が苦しいという。 道路わき の一段低い位置にある水田風の水芋田はいかにもひ弱そうな生え方で あった。
- ・私が行った際、口にしたのは山羊と豚肉、野菜(植物)は水芋チッボ オの新芽部分のみで、水芋が減っている現在では貴重な御馳走であっ た。
- ・ばんりゅうがん、蕃龍眼と書くのだろう。

住 家

『住家は海岸の平坦地に集団して建てられていますが、各家とも主家と、作業室と、涼台とは必ず所有しています。主家は地表面から2m位掘り下げた地盤に建築していますが、風と暑さを防ぐためであります。くわしいことは省略しますが、前室と後室とに別れて、軒高は低く床は板張りで前室には未婚の子供達、後室には老人が寝ています。作業室は地上に低く建てられ厚板張りの天井があり、壁は二重壁であってこれも全く暑さを防ぐための工夫であります。若夫婦が寝室として使用し、地下室があって主に物置としています。涼台は主家の前面海に面して高く造られ、暑い時の涼場とするばかりでなく、食事なども此処でやっているのをよく身受けました。このほか家によっては産室といって小さな家を作り、引き続いて若夫婦が住んでいるものもあり、また倉庫を別棟にして栗などを入れているものもあります。豚小舎は数戸で共同のものが多く、豚の耳を切ったり尻尾を切ったりして所有者の目印を付けていま

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:145 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:30

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

す。』

[補注]

- ・主家も含め全体が地表とほぼ同位置の高さであり、主家の屋根が黒く大きく見えるので住家群と分かる。例年より暑い3月だったが、主家に入ってみたところ風の通りが感じられず、失礼な言い方ではあるが、暑さ鬱陶しさが鼻をつく感じであった。しかし、これは私の間違いであって、この古くから伝わる住家の構造こそが猛暑対策として最高なわけである。一方、海に面して高くスケスケに造られる涼台はいかにも涼しそうで、下校中の小学生達が勝手に休んでいた。なお、後掲野林厚志論文によると、1966~79年に台湾政府により建造された国民住宅はヤミ族本来の生活上構造的な不便感ありで、特に多量の煙がでる魚の燻製場所や涼台がない点である。後掲足立崇論文によると、その燻製炉は神聖な魚である飛魚を調理する炉であり、主家の一番奥にある。
- ・スケール「千々岩助太郎;台湾高砂族住家の研究――第2報(紅頭嶼における高砂族住家の研究)」

ヤミ族は他の種族と同じく一定のスケールを有しないが、両手を拡げた長さを1尋=身長に等しい1単位として用いている。(シマガン氏談、07年においても使っている)

1 asarupa = 2 asarima = 4 siko = 20apatakamai これらの説明は以下のとおりである。

「ヤミ族は他の種族と同様に一定のスケールを有しないが、両手を拡げた長さ即ち1尋を単位として用いている。これをasarupaと言いその二分の一を半尋asarimaと言っている。更に肘を曲げて手を軽く握り肘関節から中指の第2関節までの長さをsiko、指を伸ばして小指から人差指まで4本の指の幅をapatakamai、紅付指から人差指まで3本の指の幅をatorakamai、中指と人差指と2本の指の幅をnuakamai、人差指1本の幅を

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:146 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

asakamaiと呼んでいる。

ヤミ族の壮年男子10名に付き実測した結果は次の通りで、sikoは1尋の約四分の一、apatakamaiはsikoの約五分の一に該当する。

但し、彼等は永年海上に出て船を漕ぎ漁撈に従事している為、5指は 著しく発達している」。

	asarupa	asarima	siko	apatakamai
Α	159. 0	75. 9	38. 0	8. 0
В	162. 0	81. 0	40.0	8. 0
С	156. 0	78. 0	37. 5	7. 8
D	156. 0	78. 0	39. 0	7. 6
Е	158. 0	79. 0	40.0	8. 2
F	163. 0	81. 5	40. 5	8. 0
G	166. 0	83. 0	41.0	8. 0
Н	163. 0	81. 5	40.0	8. 1
I	160.0	80.0	40.0	8. 0
J	165. 0	82. 5	41.0	8. 3
計	1608. 0 160. 8	804. 0 80. 4	398. 0 39. 8	80. 0 8. 0

宗 教

『ヤミ族には宗教として見るべきものはありませんが、唯天に神が存在して正邪曲直を裁いてくれるものと信じています。そして1年1回、12月にお祭をします。これをカピトアンの祭といって、蕃社によって多

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:147 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

少違いますが、豚や山羊、鶏、栗、芋などを供えて健康と大漁と、豊穣 等を祈ります。』

葬

『宗教と関連してお葬の方法が他の種族と全然違っています。本島の 蕃人は現在に於いては生活改善の一方策として当局の指導によって共同 墓地を設けて埋葬していますが、以前は屋内埋葬をしていました。即ち タイヤル族では故人の寝台の下に埋め、パイワン族では家の中央に埋め ていましたが、これは死人でも屋外に埋めては淋しがって可愛想だとい う訳であります。然るにヤミ族では昔から共同墓地があって屋外埋葬を しています。ただしヤミ族は人が一旦死すればアニトという悪魔になる のだと信じています。従って病気がだんだんと重くなってもう駄目だと なると、介抱する者はだんだん減ってしまって、お終いには親とか子供 とか極く近親の者のみになります。一旦息をひきとりますれば、死体は 直ちに麻布で包み縄で縛り上げてしまいます。そして武装した近親者が これを背負って共同墓地に埋めるのであります。武装とは籐製の丈夫な 鎧のようなものと、同じく籐で作った帽子または家宝の銀兜を着用し槍 を持ち脇刀を提げるのですが、これはアニト即ち死霊にとりつかれない ための要心であります。埋葬が終われば後を見向きもしないでさっと帰 り途中の小川で身体を清めて、家に帰ってはアニト祓いだと言って家の 周囲を槍でもって突きまくります。生前常に可愛がった者でも死ねばア ニトになるというので、誰一人見送る者もなく、まして埋葬した後に墓 参りなどということは全然なく故人の話などをすることすら極端に嫌い ます。また墓場のある森をアニトの森だといって、近寄ることも嫌いま す。私がこの度の滞在中一つの蕃社で数軒家の改築をやっていました が、一人の女が慌ただしくやって来て子供が死んだことを知らせまし た。すると改築はパッタリ止めてしまいました。この蕃社にアニトがい るというのです。私が急いで宿舎に帰ってみますと、子供の死体はもう

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:148 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

武装した父親の背中に載せられて墓場に急ぐところでした。それから3日間は改築の仕事も全く休みました。ヤミ族が如何にアニトを恐れているかわかります。|

〔補注〕

・シマガン氏は、死霊アニトanitoについて "生きているうちにアニトに とりつかれて死んだ例がある"、と言っていた。

結婚

『ヤミ族の結婚は極めて簡単です。小さい時から許婚も相当あるようですが、これは殆どあてになりません。月に幾回か、時を定めてミカリヤグという未婚の青年男女の集会がありますが、これは彼等にとって最も楽しいものでありまして、一軒の作業室に蕃社中の若い者が集まって夜を徹し唄い明かす間に縁が結ばれるものが多いそうです。結納としては男子の方から肴の眼玉かあるいは母親の首飾りの玉などを持って行きますが、最近ではこの代わりにお金を1圓位出すこともあるそうです。嫁入りの時は、小刀一丁とタニシなどを入れる小さな網袋が花嫁の持参品であります。一般に女の方が年上で離婚なども相当多く、僅か20歳位の女で既に十数回結婚したという者もありますが、本人もまた世間もその点は比較的平気のようです。』

・シマガン氏によると、「一般に女の方が年上」は誤り(当時も?)、のようである。

出生

『お産もまた頗る手軽であって助産婦の心得ある者が手伝いをするそうですが、双子のときは一人はアニトの子だといって殺すとか聞きました。これを島のインテリの青年が双子では育てるための母乳が足りないためだと、説明してくれました。』

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:149 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

〔補注〕

・シマガン氏談;一人はアニトの子だといって殺すとの点、中国復帰後 もあった由。

命名

『命名は生まれた翌日にしますが四、五歳までに又一つ別名を付けます。即ち一人で二つの名を持っているわけですが、その理由は若し同名の者が死んだ時即ちアニトになった時は直ちに別名を呼ぶようにしています。しかしそれ以上ややこしいのは子供が生まれることによって父母の名も祖父母の名も変わってしまうことです。即ち長子が生まれると父母祖父母の名が変わります。

ヤミの言葉で父をシヤマン、母をシナン、祖父母をシャップンといいます。今、太郎という青年と花子という娘さんが結婚したとします。子供のない間は二人とも太郎君花子さんで通用しますが、仮に義雄という長男が出来たとすればその時から太郎と花子という名は消滅してシヤマン義雄、母をシナン義雄、即ち義雄の母と呼ばれることになりますし、又祖父母はシャップン義雄、即ち義雄の祖父母と呼ばれるようになります。もし義雄のお母さん即ち花子さんが里方に於いても長子であれば、里方の父母祖父母の名もまた同様に変わります。ところが又不幸にして義雄さんが死んだ時には名前は総て逆戻りしまして、次の子供によって又同様の変化が起こるわけで、実にややこしく、駐在所の戸口調査簿は附箋が一杯で整理に困りぬいているようです。しかも一度こうして名前が変わったら、もう以前の名前など呼んでも知らぬ顔して見向きもしないということで、いよいよ(愈々)もってややこしくなります。

なお、名前の前には必ず「シ」を付けます。シマガン、シマユカス、シモセヨウ、シタピランなどで、又私どもにも呼びます。シイシダ(石田)さん、シタグチ(田口)さんなどとシを付けて呼びます。』

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:150 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

〔補注〕

- ・要するに、長男が名前を継いでいく、とのシマガン氏の説明。
- ・ここで、何回か登場したシマガン氏を紹介したい。いつ頃からか、シ マガン、シマガンという、SKの声を覚えている。シマガンことシャプ ン・パカパツン(タオ族名)氏、台湾の中国名は廖株氏、日本植民地 時代の日本名は聞きもらした。シマガン氏は、SKが1940(昭和15)年 に調査渡航した際、当時13歳でSKの実測の手伝いをして出会った。 記憶力良く島の古い風習や言語などの知識が深く、そういった人物に はすぐ惚れ込むSKが重用した方である。何故シマガンさんと呼ぶの かは、上述のように名前の付け方に独特の決まりがある故である。戦 後シマガン氏は中国復帰後の蘭嶼で最初の牧師になった。また郷民代 表にも任命され度々"台湾に行った"由。SKは1969、70年に蘭嶼に 行ったが69年に再会した。その後、同氏が亡くなったとの風の便りが あったが、言語学者の東大名誉教授十田滋氏がそのシマガン氏から聞 き取り調査をされておられてSKとの関係に気付かれ、私に連絡戴い た次第である。土田先生のお蔭であるが、私の主観的発想で取り敢え ず"父がお世話になったお礼の意をもって会いに訪島したのであった。 シマガン名がシャプン・パカパツン名に変わりシマガン名が無くなっ たことも、音信が途絶えた一因だったのであろう。SKは終生、シマガ ン君といっていた。シマガン氏は夕日の沈むのを見ながら、"人生(人 間) は太陽の如し、陽はまた明日も昇る"、とタオ族の人生観を私に 語ってくれた。シマガン氏については、千々岩助太郎「高砂族住居研 究の思い出(えとのす第1号1974年)」に、懐旧記が載っている。

植物

『植物にせよ動物にせよ私は全く門外漢でありますが、ただ見たままを申し上げてみますと、植物として珍しいものとしては、ゴバンノアシ、バンリュウガン、オホバアカテツ、パンノキ、コウトウバセウ、コテフ

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:151 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

ラン等であります。ゴバンノアシは開花したものも実ったものもありま したが、花は純白の大きな四枚の花びらがあって、十二、三センチの長 さの多数の雄蘂は房のようで根元のほうが白、先のほうが薄赤のぼかし になっていて、なかなか見事なもので、開花時には芳香を発しています。 果実は四陵四面体の丁度碁盤の脚のような形をしています。しかしヤミ 族はこの木を非常に嫌っています。ヤミの言葉でトバといいますが「ト バトバイ」といえば「トバのようないやな奴」という意味で、ヤミ語で は最下等の悪口であります。トバの木を見たら女は妊娠しない、又トバ の実を打ち突けられたら腫れ物になるといって嫌っています。蓋し枝振 りが非常にグロテスクであり、又種子の中に麻痺性の物質を含んでいる そうで、これらが嫌われる原因でありましょう。バンリュウガンはチャ イと申しまして果実は本島産のものより遙かに大きく直径四センチから 五センチのものもあり外皮は茶褐色でなく緑色であります。非常に甘い のみならずその種子を茹でたり炒ったりして食べると、丁度栗のような 味がします。パンの木は果実も種子も食べ、オホバアカテツやコウトウ バセウなどはヤミ達の最も喜ぶ果物であります。』

動物

『動物もまた色々珍しいものが多く、蝶類ではコウトウキシダアゲハが最も貴重なもので、オオゴマダラは墓場に多くいるためにヤミ達はアブチレマンだと嫌っています。チレマンというのはヤミ語で上等あるいは美しいということで、アブチレマンはその打ち消しで下等あるいは見苦しいということであります。紅頭嶼特産のカタザウ例えばコウトウカタザウ、スカタザウなどは道を歩いていていくらでも採集できます。コノハヅクの一種でコウトウコノハヅクという鳥もいます。内地ではコノハヅクの啼声は特に仏法僧といって古来珍重がられていますのに、ここでは墓場の森によく棲んでいるばかりで、アニトの鳥あるいはアブチレマンの鳥だといって嫌われています。キクチメジロもヤミの子供が持っ

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:152 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

てきました。また椰子の実を食べるというヤシガニも捕まえられて子供 の玩具にされたりしていますが、食べてみるとなかなか美味しいもので ありました。また旅行者が好んで食べるウナギはこの島の水田にはいく らでもいますが、これは本島の老鰻と全く同じだそうでぬるぬるしているのを嫌ってヤミは一切これを食べません。ハクビシンの子供も駐在所で飼ってありましたが実に可愛いもので島では狸だといっています。』 「補注〕

- ・タデガン=海鰻、トナ=川鰻との区別あり。
- ・コウトウキシダアゲハ(天然記念物)は超大型で鱗粉の色が七変化する見事な蝶である。飛んでいる実物は見れなかったが、飼育中の幼虫は流石に大きかった。コウトウキシダアゲハを含む私の所有する蝶の内17頭は蘭嶼産である。

渡航上の注意

『以上述べましたようにこの小さな島は学術研究上実に珍しい島でありますために、これからも渡航される方が続々とあることと思いますので、注意事項を二、三申し上げて見ましょう。

- 一、蕃地でありますから他の蕃社と同様に台東庁かあるいは台東郡に於いて入蕃手続きをせねばなりません。
- 二、何れの蕃地でもそうでありますが、殊に文化の程度の低いこの島に おいて旅行者はよい風習例えば酒や煙草の味を知らないような風習は あくまで継続し悪い習慣をつけないよう、即ち現地警察官と協力して 教化開発に努めるよう心掛けねばなりません。
- 三、交通不便で今のところ月二回の定期船などは全くあてになりません ので、先ず一ヶ月分位の食料品は用意して行くべきでしょう。島で あっても魚はヤミ達の食用に供するのみで僅少な旅行者の口にさえも 入らない程度でありますし、野菜類なども不足勝ちであります。』

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:153 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

高岡法科大学紀要 第21号 (mar.,2010)

おわりに

以上のように、SKが約70年前に台湾の蘭嶼に住む原住民タオ族について解説したものに若干の補注を付してみたが、私の浅学なることから、単なる蘭嶼紹介に過ぎないものとなった。補注はその後の諸賢の調査研究を下手に追加すればするほど、従前の状況と乖離してくる感がしないでもない。

ところで、SKの解説にはあまり出てこないが、70年前の状況は、先ず渡航の際の小型船舶や荒海強風による危険(今や航空便では僅か20分である)、旅館もなく食料の調達も極めて困難な中の、紅頭嶼行きであった。勿論、かの先覚者鳥居龍蔵らが行った1897年頃の言わば探検的時代とは全く異なるわけではあるが。

SKはその後の1969(昭和44)年と70年に、やっとの気持ちで紅頭嶼(蘭嶼)に行き、シマガン氏ら旧知のたくさんの人々と旧交を温めながら、またまた交通不便ななかで調査を続けている。その調査こそは、原住民の人々がその日の仕事をなげうつて、手伝ってくれたものであった。見送りの人々が別れを惜しんで涙にくれたり、仕事に出る前だといって早朝4時半に別れの挨拶に来たり、なかなかのものである。日記によると計15泊ほどしているが、その頃でも、泊まる所は旧知の方の3畳間に3、4人で寝たり、小学校の板の間を借りて寝泊まりしている。食事は、携行したインスタント食品ばかりの自炊であるが、教え子である台湾人の野菜差し入れに、大感謝などしている。その時点でSKは73さいである。

要するに、徐々にすすむ近代化のなかでも、紅頭嶼の人々の気質は基本的にほとんど変わりはない、と言えよう。3月に豪快な海でサーフィンを楽しむ日本人青年団体のはしゃぎ声が耳に触ったが、現地の人々との交流も心掛けて貰いたいものである。

Title:133-154千々岩6.ec8 Page:154 Date: 2010/03/09 Tue 18:59:35

"1940年頃の蘭嶼"(台湾タオ族)

資料

- ①基本資料〔紅頭嶼〕昭和15年8月22日JFAKより放送の全文
- ②千々岩助太郎;台湾高砂族住家の研究——第2報(紅頭嶼における高砂族住家の研究)
- ③千々岩助太郎;高砂族住居研究の思い出(えとのす第1号1974年)
- ④宮本延人・瀬川孝吉・馬淵東一「台湾の民族と文化」(六興出版1987)
- ⑤野林厚志「ヤミ族の社会生活についての予備的調査と今後の課題」(台湾原住民研究第1号所収)
- ⑥足立崇「"住まい"の場所秩序に関する建築論的研究——台湾ヤミ族の "住まい"をとおして——」